

## ティーチング・ポートフォリオ

永嶋久美子

(記入日：2023 年 8 月 21 日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

調理学実験 (2 年前期選択必修科目 1 単位), 給食管理実習 (1) (3 年前期選択必修科目 2 単位), 給食管理実習 (2) (3・4 年選択必修科目 1 単位), 栄養教育実習演習 (事前事後指導) (3 年通年選択必修科目 1 単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、科学的根拠に基づいた食、栄養、健康、調理を理解し、その問題解決に向けた行動をPDCA サイクルによって主体的に取り組む力を身に付けることである。また、これらの力を身に付けた実践力のある栄養士、栄養教諭の養成を目指している。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学習を進めるにあたり、各科目では一般的な事例をあげ科学的根拠の学習、基準、技術の習得を進めている。また、授業後の学習の振り返りのためのワークシートを作成し、授業後の課題とした。提出された課題はコメントを入れ、質問などは次の授業で解説するなどのフィードバックをした。調理学実験は、各回の実験のレジュメ、レポートフォーマット、図表フォーマットを Teams で配信した。レポートは Teams の課題にて提出し、ループリックを活用して評価し、コメントと共に次回授業までにフィードバックした。栄養教育実習演習 (事前事後指導) では身近な事例および給食施設の事例を例に挙げ、ワークシートを活用しながら学習を進めた。実際の現場の状況を学ぶため映像資料などを活用した。給食管理実習 (1) では配布資料、授業で記録するフォーマットは Teams のファイルで共有した。また、実習においては、コロナウィルス感染予防のための衛生手順を実践した。試食の評価等は Forms を活用し、PDCA サイクルにより実習を改善しながら実施した。また、大量調理の実習では、TAとして4年生が実習のサポートをした。同時に実習の様子を記録するために動画の撮影をした。これらの動画、画像を実習班で共有し、実習の振り返りに活用した。客観的な視点で実習を振り返ることができ、次の実習にこれらの振り返りが活かされた。さらに、これらの動画を活用して、実習をプレゼンテーションするための動画編集をするなど、新たな取り組みと実施した。給食管理実習 (2) 3 年次後期に実施した学外実習の振り返りとともに様々な実習施設の給食の特徴について学ぶことを目的とした。グループワーク、発表、アンケート調査などを Teams, Forms を活用して実施した。

### 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

すべての科目において、学生相互が自主的に学び合い、授業時間外に学修時間を

設けていることが確認できた（エビデンス 1）。調理学実験，給食管理実習（1），給食管理実習（2）のレポートおよび報告書などの作成では専用の教材を使用した（エビデンス 2）。調理学実験および給食管理実習（1），（2）では参考資料およびワークシートを配布し，事前・事後学修を促すとともに実践的な理解につながった（エビデンス 3）。給食管理実習（1）・（2）では現場における実践状況を理解するため映像教材を活用したところ，基礎的学習内容を実践的な視野でとらえることにつながった（エビデンス 4）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

調理学実験および給食管理実習（1）などで学生同士が授業時間外に検討，議論し，資料収集，データ分析などを行う機会を増やす（ラーニング・コモンズ）。また，事前・事後学修を継続的に進められるよう，資料収集及び分析などの具体的提示を行う。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 テキスト 大羽和子他（編著）（2003）調理科学実験 学建書院  
岡本裕子他（編著）（2019）給食経営管理テキスト 学建書院  
文部科学省（2011）調理場における衛生管理&調理技術マニュアル  
学建書院
- 3 参考資料およびワークシートなどの配付（非公開）
- 4 映像資料 金田雅代（総監修）（2014）学校給食管理実践ガイド 丸善 等

## ティーチング・ポートフォリオ

永嶋久美子

(記入日：2024年2月16日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

調理学実験 (2年前期選択必修科目1単位), 給食管理実習 (1) (3年前期選択必修科目2単位), 給食管理実習 (2) (3・4年選択必修科目1単位), 栄養教育実習演習 (事前事後指導) (3年通年選択必修科目1単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、科学的根拠に基づいた食、栄養、健康、調理を理解し、その問題解決に向けた行動をPDCA サイクルによって主体的に取り組む力を身に付けることである。また、これらの力を身に付けた実践力のある栄養士、栄養教諭の養成を目指している。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

学習を進めるにあたり、各科目では一般的な事例をあげ科学的根拠の学習、基準、技術の習得を進めている。また、授業後の学習の振り返りのためのワークシートを作成し、授業後の課題とした。提出された課題はコメントを入れ、質問などは次の授業で解説するなどのフィードバックをした。調理学実験は、各回の実験のレジュメ、レポートフォーマット、図表フォーマットを Teams で配信した。レポートは Teams の課題にて提出し、ループリックを活用して評価し、コメントと共に次回授業までにフィードバックした。栄養教育実習演習 (事前事後指導) では身近な事例および給食施設の事例を例に挙げ、ワークシートを活用しながら学習を進めた。実際の現場の状況を学ぶため映像資料などを活用した。給食管理実習 (1) では配布資料、授業で記録するフォーマットは Teams のファイルで共有した。また、実習においては、コロナウィルス感染予防のための衛生手順を実践した。試食の評価等は Forms を活用し、PDCA サイクルにより実習を改善しながら実施した。また、大量調理の実習では、TAとして4年生が実習のサポートをした。同時に実習の様子を記録するために動画の撮影をした。これらの動画、画像を実習班で共有し、実習の振り返りに活用した。客観的な視点で実習を振り返ることができ、次の実習にこれらの振り返りが活かされた。さらに、これらの動画を活用して、実習をプレゼンテーションするための動画編集をするなど、新たな取り組みと実施した。給食管理実習 (2) 3年次後期に実施した学外実習の振り返りとともに様々な実習施設の給食の特徴について学ぶことを目的とした。グループワーク、発表、アンケート調査などを Teams, Forms を活用して実施した。

### 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

すべての科目において、学生相互が自主的に学び合い、授業時間外に学修時間を

設けていることが確認できた（エビデンス 1）。調理学実験，給食管理実習（1），給食管理実習（2）のレポートおよび報告書などの作成では専用の教材を使用し（エビデンス 2），Teamsで共有することで学生同士、教員間の情報共有および理解につながった。調理学実験および給食管理実習（1），（2）では参考資料およびワークシートを配布し，事前・事後学修を促すとともに実践的な理解につながった（エビデンス 3）。調理学実験においてはループリックを活用した評価がフィードバックされたことにより，その後のレポートの充実につながり，授業の回を重ねるごとに全体としてレポートの評価の向上が満たれた。給食管理実習（1）・（2）では現場における実践状況を理解するため映像教材を活用したところ，基礎的学習内容を実践的な視野でとらえることにつながった（エビデンス 4）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

調理学実験および給食管理実習（1）などで学生同士が授業時間外に検討，議論し，資料収集，データ分析などを行う機会を増やす（ラーニング・コモンズ）。また，事前・事後学修を継続的に進められるよう，資料収集及び分析などの具体的提示を行う。給食管理実習（2）においては，実習施設ごとの給食の運営および特徴がとらえやすく，実践力向上につながる，グループワーク，プレゼンテーションの方法について検討を行う。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）
- 2 テキスト 大羽和子他（編著）（2003）調理科学実験 学建書院  
岡本裕子他（編著）（2019）給食経営管理テキスト 学建書院  
文部科学省（2011）調理場における衛生管理&調理技術マニュアル 学建書院
- 3 参考資料およびワークシートなどの配付（非公開）
- 4 映像資料 金田雅代（総監修）（2014）学校給食管理実践ガイド 丸善 等

## ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 氏名 香山綾子

(記入日:2024年 2月 14日)

### 1 教育の責任

生活文化学科は“社会と生活”“生活と家庭”“栄養と健康”の3領域のカリキュラムが設けられており、衣・食・住の幅広い教養と多彩な資格を学生に取得させることが教員に課せられた使命となっている。私は、“栄養と健康”分野の教員として、以下に示す生命科学系科目の講義や実験を担当している。

担当科目:基礎ゼミナール(1年前期必修科目 2単位)、生化学入門(1年前期選択科目)、解剖生理学(1年前期選択科目)、解剖生理学(1~4年前期選択科目)、運動生理学(1年後期選択科目)、生化学(2年後期選択科目)、生活文化専門演習(3年生通年必修科目 4単位)、生化学・解剖生理学実験(2年前期選択科目)、食品衛生学実験(3年後期選択科目)、人体の科学(1~2年後期選択必修科目)

### 2 理念

私の教育理念は、人生のあらゆる局面において、周囲の信頼に応えられる実践力・課題解決能力と、周囲を幸せにできる人間力・総合力をもつ人材を育成することである。生命科学系科目の教育を通して生命のしくみや生命活動の意味を理解させ、教養を有した社会に貢献する人材として学生が卒業していくことを目標にしている。

### 3 方法

学生に対する教育のポイントは、授業を積極的・主体的に受ける環境を整えることと、当該分野の基礎知識と研究の意義を理解してもらうことである。この目的を達成するため、以下の方法を実践している。(1)学生に提示する資料は教科書的な知識の羅列とはせず、関連分野の最新知見などを盛り込み当該分野の面白さや意義を伝えるべく配慮する。(2)学生の身近で最近起こっている出来事や世間で注目されている出来事をその日の授業内容と関連させて導入部分に用いることにより、積極的な学修意欲を高めるよう配慮する。(3)学生の理解度を把握しつつ積極的な姿勢で授業にのぞんでもらうため、授業の最後に確認問題や小レポート課題を課す。(4)講義形式の授業は、パワーポイントのスライドと補足資料を使用し、知識の定着を図る。

具体的には、特に苦手意識を抱く学生が多い解剖生理学や生化学は、多くの図表やイラ

ストを使用し丁寧に解説する。解剖生理学、運動生理学、生化学は学ぶ内容(知識量)が多いため、再説明や質問を投げかけ、落第しないように配慮する。基礎ゼミナールは、レポート作成の基礎から丁寧に解説・指導し、多くの学生が1つのテーマに関して簡単なレポートを完成させられるように努める。生活文化専門演習は、卒業論文のテーマ選択を目標に、文献の検索方法や読み方を訓練し、卒業研究を完成させるために必要な要素を学ばせると同時に、身の回りには多くの興味深い課題が存在していることに気がけるように誘導する。実験系科目は、実験レポートや課題を課して、実験内容の理解、及び、探索力や文章力の向上を目指す。

#### 4 成果

ほとんどの学生は真摯に講義や実験に取り組み、単位を取得した。Teams を活用した講義資料の配布や質問への対応を行うことで、学生の学ぶ意欲を保てたのではないかと考えている。しかし、実験レポートに関しては、実験内容の理解促進や客観的にわかりやくまとめる力を養うことを目的としていたが、提出することが目的となっている学生が見受けられたので、このような学生に対する対策が今後の課題である。また、基礎ゼミナールに関しては、参考資料の要点抽出に苦勞する場面が多く見られ、半期の指導のみでは読解力の向上は難しかった。1年後期以降に学ぶ他の教科において、読解力を養う指導を試みたい。

#### 5 今後の目標

担当する生化学、解剖生理学、運動生理学は、学ばなければならない知識が膨大な科目であるために、知識定着の改善が今後の課題である。小テストの頻度を増やすことで対応することを考えている。また、実験レポートに関しては、模範レポートを配布する・優秀レポートを表彰するなどの工夫を施すことで、実験レポートの質の向上を目指したい。

#### 6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- ① 授業で提出された課題、レポート(非公開)
- ② 2023 年度前期授業評価アンケート、2023 年度後期授業評価アンケート
- ③ テキスト

生化学若い研究者の会(2021)これだけ!生化学第 2 版 秀和システム

北口哲也 みんなの生命科学(2016)化学同人

志村二三夫(2021)栄養科学イラストレイテッド 解剖生理学 羊土社

浅見直美 川中健太郎 (2021)栄養科学イラストレイテッド 運動生理学 羊土社

菌田勝(2020)栄養科学イラストレイテッド 生化学 羊土社

桑田てるみ(編)(2013)学生のレポート・論文作成トレーニング 実教出版

# ティーチング・ポートフォリオ

齋藤 美重子

(記入日：2023年9月1日)

## 1. 教育の責任

担当科目：社会生活入門（1）（1年前期必修科目2単位）、社会生活入門（2）（1年後期必修科目2単位）、消費生活論（2～4年前期選択必修科目2単位）、家庭科教育法Ⅰ～Ⅳ（2～4年前期後期選択必修科目2単位）、コミュニケーション能力基礎演習（2年後期必修科目）、生活文化専門演習（3年通年必修科目4単位）ワーク・ライフ論（2～4年前後期選択科目2単位）、フードビジネス入門（2～4年後期選択必修科目2単位）、家庭科教育法（2～4年後期選択必修科目2単位）、家庭（1～4年後期選択必修科目2単位）

## 2. 理念

私の教育理念・目標は、学生が生活者の視点を持ち、生活と世界・自然とを総合的に捉え、かつ生活課題を科学的に分析して、人と社会・環境との関係性を探究する力をつけることである。現代社会を多面的に探究し本質を熟考することをおして、人間関係形成能力、論理的思考力、課題発見・判断能力を培い、自分らしい最善の生活を営み、将来にわたり学び続ける態度を育成するとともに、社会に貢献できる人材を育成することである。

## 3. 方法

社会生活入門、フードビジネス入門、消費生活論、家庭科教育法では、ICTを活用し各自の課題探究と、知識構成型ジグソー法、ブレインストーミングやKJ法を用いたグループ学習により多様な意見を吸収させ、発表、再び個人で考察する時間を設けるという往還の中で深い学びを促す。また、資料提供と課題探究学習による反転授業を行う。さらに、パワーポイントやDVDなど視聴覚教材により学習の理解促進を図る。

生活文化専門演習では、文献資料の担当部分についてレジュメを作成・発表させ、理解を深め現状分析を促す。認定NPO法人APLAとのオンライン会議により南北問題など社会構造的問題についてディスカッションし、フェアトレード商品普及策を考案した。認定NPO法人自立生活サポートセンター・もやいとNPO法人ごはんプラスによる路上生活者への食材配りの参与観察を行い、貧困の現状についてディスカッションを行い、オーセンティックな学びを得た。

コミュニケーション能力基礎演習では、学生同士の対話や主体性を促進させるために、ICTを活用したプレゼンテーションを行う。家庭科教育法では、学習指導要領を詳細に検討し、学習指導案の作成と学生相互の評価を行う。知識と実習を融合させて知識の定着を図ったり、ICTを活用した授業を行うなど、よりよい教育方法について授業案を作成することをおして探究させる。模擬授業の実践、学生相互評価により振り返って、再度修正した模擬授業案を作成させることで学びを深める。

## 4. 成果

すべての科目において、学生が真摯に課題に取り組み、授業時間外に学修時間を設けていることがわかった(エビデンス①、②)。生活文化専門演習では文献資料の理解を深め、さらに現状把握と今後の課題について探究できた(エビデンス①、③-1)、③-5)。家庭科教育法、コミュニケーション能力基礎演習では、学生同士が主体的に学び合ったことが確認できた(エビデンス①、③-2)、③-3)、③-4))。

## 5. 今後の目標

オーセンティックな学びをもたらす専門家や実践家を招聘することも異世代交流も行っていくことで人間関係形成能力を高めたい。また、前年度まではフィールドワークはZOOMを使用したオンライン会議により代用したが、コロナ収束後は再開させ現状分析を行っていききたい。

ラーニングコモンズを活用し、学生同士が授業時間外にも対話をして、資料収集やレポートを検討する機会を増やす。また、リアクションペーパーをさらに活用し、再考を促して生涯をとおして学び続けるよう、主体的に学ぶ態度を育成したい。

## 6. エビデンスとなるもの

①リアクションペーパー(非公開)

②レポート(非公開)

③生活文化学科ホームページ(公開)

1) <https://www.kgwu.ac.jp/2022/12/19/%e3%80%90sdgs%e3%81%ab%e5%90%91%e3%81%91%e3%81%9f%e5%8f%96%e3%82%8a%e7%b5%84%e3%81%bf%e3%80%91%ef%bd%9e%e3%83%95%e3%82%a7%e3%82%a2%e3%83%88%e3%83%ac%e3%83%bc%e3%83%89%e3%82%b3%e3%83%bc%e3%83%92/>

2) <https://www.kgwu.ac.jp/2023/02/22/lets-do-our-best%ef%bc%81%e2%80%95%e4%b8%ad%e5%ad%a6%e3%83%bb%e9%ab%98%e7%ad%89%e5%ad%a6%e6%a0%a1%e5%ae%b6%e5%ba%ad%e7%a7%91%e6%95%99%e5%93%a1%e6%8e%a1%e7%94%a8%e8%a9%a6%e9%a8%93%e3%81%ab%e5%90%91/>

3) <https://www.kgwu.ac.jp/2022/11/01/%e5%ae%b6%e5%ba%ad%e7%a7%91%e6%95%99%e8%82%b2%e5%ae%9f%e7%bf%92%e3%81%a8%e6%95%99%e5%93%a1%e6%8e%a1%e7%94%a8%e8%a9%a6%e9%a8%93%e3%81%ae%e5%a0%b1%e5%91%8a%e4%bc%9a%e3%82%92%e8%a1%8c%e3%81%84%e3%81%be/>

4) <https://www.kgwu.ac.jp/2023/08/09/%e5%ae%b6%e5%ba%ad%e7%a7%91%e6%95%99%e5%93%a1%e6%8e%a1%e7%94%a8%e4%b8%80%e6%ac%a1%e8%a9%a6%e9%a8%93%e3%80%80%e7%94%9f%e6%b4%bb%e6%96%87%e5%8c%96%e5%ad%a6%e7%a7%91%4%e5%b9%b4%e7%94%9f%e5%85%a8%e5%93%a1/>

5) <https://instagram.com/seikatsubunka?igshid=OGQ5ZDc2ODk2ZA==>

④テキスト:

佐藤真弓・齋藤美重子編著(2020)『自然と社会と心の人間学』一藝社

プレゼンテーション研究会(2015)『学生のためのプレゼンテーション・トレーニング』実教出版

文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編—平成29年7月』



東洋館出版社

文部科学省（2018）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 技術・家庭編—平成 29 年 7 月』開隆堂出版

文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 家庭編 平成 30 年 7 月』教育図書

開隆堂（2022）『家庭総合—明日の生活を築く』『技術・家庭 家庭分野』『わたしたちの家庭科』

⑤参考資料及びワークシートなどの配布（非公開）

⑥映像資料：

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「どこに行ってる、私のお金？」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「スマホの真実」

特定非営利活動法人アジア太平洋資料センター（PARC）「プラスチックごみ」

コレクティブハウスかんかん森 居住者組合「森の風」「つながって、暮らそう！～10年目の、コレクティブハウスかんかん森～」

Andrew Morgan 監督「THE TRUE COST」,

「awareness test」

「The future of work」

東京学芸大学次世代教育研究推進機構「21CoDOMoS」

[www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/news/21codomos.html](http://www.u-gakugei.ac.jp/~jisedai/news/21codomos.html)

# ティーチング・ポートフォリオ

佐藤 真弓

(記入日： 2023年 9月 27日)

## 1 教育の責任

家庭経営学（専門教育科目必修2単位）、家族関係学（専門教育科目必修2単位）、家庭経済学（専門教育科目選択必修2単位）、現代の社会（共通教育科目選択必修2単位）、女性と現代社会（専門教育科目必修2単位）、資源と環境（専門教育科目選択必修2単位）など

## 2 教育の理念

私の教育理念・目標は、現代社会における様々な諸相についてその本質的要因を探り考察し、それらを自分自身の生活課題としてとらえようとする主体性を養うこと、よりよい生活、人生を送るために、それら生活課題に対してどのような解決法があるかを考え、自分らしいライフデザインを構想し実践できる態度を身につけることを目的としている。

## 3 教育の方法（実践の工夫）

家庭経営学、家族関係学、家庭経済学、現代の社会、資源と環境では、ワークシート(word,excel)や資料を配布し学習ポイントの習熟を図るとともに、事後学修に役立てられるようにした。パワーポイントのスライド、写真や動画を使用しながら講義し、毎授業後に小課題レポート、もしくは「forms」機能による小テストを実施し知識の定着を図った。「forms」機能を利用して、回答を提出後すぐに学生が自分の点数、回答に対する教員からのコメントがみえ、復習に役立てられるようにした。「課題」機能からのレポート提出には一人ひとりフィードバックのコメントを付した。授業では前回授業の復習として小課題レポート、小テストの講評を行った。

また、家庭経済学、資源と環境では内容に関連した書籍について輪読・ディスカッションを行うことにより基礎理論の徹底および社会事象への関連づけを図った。また家庭経営学ではiPadを用いて自身の居住地の地勢、特徴等を検索させ、それをもとにプレゼン、ディスカッションを行い、また、資源と環境では身近な生活資源を取り上げ文献資料をもとにプレゼン資料を作成しディスカッションを行った。

また、女性と現代社会では自ら興味関心のある社会の課題について図書館等の文献や官公庁の資料をもとにレポートを作成、それを発表しディスカッションを行うことにより、学生が自らの生活課題を探り出し主体的な解決法を探ることができるようにした。

## 4 成果（結果と評価）

ワークシート、パワーポイントのスライド、YouTube 動画を使用して授業解説を行えたことにより、学生が授業内容により興味をもって集中して取り組むことができたのではないかと考える。現代の社会の授業評価アンケートには「毎回非常に興味深い講義内容でとても楽しく授業を受けることができた」とのコメントがあった。

また、家庭経営学、資源と環境の演習形式の授業では、幅広い視野からの課題設定や主体的な課題解決態度や意欲の育成につなげることができたと考える。毎授業ごとの小課題レポート

の提出や「forms」機能を用いた小テストの実施により知識の定着、生活課題の新たな発見などが確認できた。

女性と現代社会では teams や対面の際の指導により、基礎ゼミ時のレポート作成方法を復習し、文献研究の結果をプレゼンさせることにより実践応用力、表現力などを養うことができた。発表後のグループディスカッションでは、課題の把握、問題意識の共有、問題解決について主体的に取り組むことができたと考える。またそれぞれの課題について当事者意識をもちながら自身の生活課題としてとらえることができるようになったと考える。授業評価アンケートには「自調自考できる時間をもらった」とのコメントがあった。本授業での「知識を詰め込むのではなく、自分で考える」という目標が達成されているのではないかと考えられる。

## 5 今後の目標

受講生が多い場合でもグループワークやディスカッションなど演習形式をさらに積極的に取り入れていきたい。iPad など機器も積極的に活用していきたい。資料や文献を使用した事前事後学修をより具体的に促す。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・ワークシート、レポート（小課題、事前事後課題等）、forms、パワーポイントスライド
- ・期末レポート
- ・佐藤真弓『生活と家族』一藝社（2016）
- ・佐藤真弓・齋藤美重子編『自然と社会と心の人間学』一藝社（2020）
- ・（一社）日本家政学会家政教育部会編『家庭生活の支援』建帛社(2014)
- ・藤原辰史『縁食論』ミシマ社（2020）
- ・藤原辰史『食べるとはどういうことか』農文協（2019）
- ・村上陽一郎編『コロナ後の世界に生きる』岩波新書（2020）
- ・斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社新書(2020)
- ・（一社）日本家政学会生活経営学部会編『持続可能な社会をつくる生活経営学』朝倉書店（2020）
- ・重川純子『改訂新版生活経済学』放送大学教育振興会(2020)
- ・web サイト（授業資料として）

消費者庁 HP <https://www.caa.go.jp/>

厚生労働省 HP <https://www.mhlw.go.jp/index.html>

令和4年人口動態統計

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai22/dl/kekka.pdf>

農林水産省 HP <https://www.maff.go.jp/>

経済産業省 HP <https://www.meti.go.jp/>

外務省 HP <https://www.mofa.go.jp/mofaj/>

• YouTube 動画（課題資料として）

ベアテ FC2 Video <https://www.youtube.com/watch?v=KhA7FNwSdB0&t=192s>

NHK スペシャル「人類誕生」1～8

[https://www.youtube.com/playlist?list=PLcynJ47QaWNvciCH-NvZL9DQW\\_J1Mlazi](https://www.youtube.com/playlist?list=PLcynJ47QaWNvciCH-NvZL9DQW_J1Mlazi)

(記入日：2024年2月18日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

被服ユニバーサル・デザイン (2~4年, 専門教育選択必修, 後期2単位)、カラーコーディネート (1) (1~4年, 専門教育選択必修, 後期2単位)、カラーコーディネート (2) (1~4年, 専門教育選択必修, 後期2単位)、被服学概論 (2年, 専門教育選択必修, 後期2単位)、複数教員科目：医療秘書実務実習演習 (事前・事後指導) (3~4年, 専門教育選択, 通年1単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教育理念・目標は、日常生活の中から物事の起源や先人たちの知恵などを理解し、現代の身の回りにある資源や環境に関わる問題点を多角的に視る姿勢を身につけることである。さらに、問題解決に結びつく工夫や自然との共生社会の仕組みを知り、SDGsな社会になるため各自が出来ることを養うことである。また、実践を通して日常生活、環境の違いや科学の進歩を知ること、コミュニケーションスキルをアップさせ、生活に反映させる。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

対面授業で行った。

被服ユニバーサル・デザインでは、サステナブル社会 (SDGs) の中、安全快適の要求要素である衣服を、ユニバーサル・デザインの視点から検討し、デザインの変更や工夫の方法をアクティブラーニングで実践した。実際の衣服にミシンやアイロン等を使用して手を加えることで、不都合だった点の改善を具体的に理解することが出来た。

カラーコーディネート (1) では生活を豊かにする色彩計画について住生活を中心に環境や健康に関する事例を演習要素も取り入れながらレクチャーをした。テキストは、オールカラーページで、感覚と文化をふまえた色の効果が理解しやすいものにして、色の持つ心理的効果を確認しながら、インテリア・カラー・ブックと配色カードを使用しワークシートを完成させた。また、可視化で理解しやすくするため、カラーボードを使用し、各自で縮小版の立体マイルームを製作し、具体的な部屋の構造と色彩、小物等のバランスを確認することを実践した。

カラーコーディネート (2) では、自分の個を演出する衣服の色彩と食生活を左右する食卓の色彩について学んだ。色の持つ心理的効果、他者に与える影響、食欲を左右する配色等を work paper 配色実習台紙と配色カードを使用して、実践を試みた。また、各自が持つ色と言葉のイメージとを可視化するため、ファッションマップを作製し理解力拡大を狙った。

被服学概論では、中高の家庭科の学習指導要領に示されている、被服の構成・材料・機能性・色彩・管理等快適な衣生活を遂行するため、最新の被服関連情報をプリントにして配布し、理解しやすくしてテキストの章ごとにある演習問題に各自取り組んだ。

医療秘書実務実習演習 (事前・事後指導) では、医療秘書実務士の資格取得をするための必須の病院実習に必要な準備や心構えについてレクチャーをした。実習前には、実習先での実習生としての必要な

スキルや実習ノートの記入方法の説明をした。個人情報の取り扱い方、身だしなみ等については、実習先のスタッフと事前打ち合わせをした後、を行った。実習後は、実習中を振り返りながら、実習で身についたこと、印象に残ったこと、感謝したいこと等をお礼状に簡潔にまとめる方法をレクチャーし、お礼状の下書きをした。下書きの添削をした後、清書をしてお礼状の投函をした。

#### 成果（どうだったか：結果と評価）

被服ユニバーサル・デザインでは、現在 SDGs の観点から環境への関心や勿体ないという風潮が高まっていることを受けて、自分の身の周りを見回してみることにした。そして、着なくなった被服の問題点と解決策をまとめ、自身で改善できることを実践した。その結果、自分自身が着やすい被服は誰にでも着やすい被服であり、自分自身や家庭での生活の中には少しの工夫でユニバーサルな品にすることが出来て、身の回りの品をもう一度確認するきっかけに繋がった。

カラーコーディネート（1）では、住環境をパブリックスペースやエクステリアとインテリアに分けて実際の建築物や部屋の写真等を用いて説明したうえで、自身の周りと比較検討した。その結果、建築物に使用されている色彩や形状に込められていた意味やメッセージを理解することが出来た。また、食環境についても照明とカトラリーによる食材の見え方や食欲との関係等を写真やカラーカードを使用して可視化した。その結果、今まで実践していたことが逆効果、思い違っていたことが判明し実践教育が出来たと示唆することが出来た。

カラーコーディネート（2）は、衣環境について、普段は好き嫌いだけで選んでいた被服について、色彩がいかに大きなウェイトを占めているかについて、様々なファッション雑誌を用いて確認をした。その結果、価格を最大重視していたこと、好きな色が似合う色ではなかったこと、体型に合っていないデザインを選んでいたこと等が実践を通して判明することが出来た。また、顔の近くに持ってくる色によって、他者が抱く印象や性格まで違ってくことも理解できた。さらに、黒色や紺色は赤みがかかった黒色や青みがかかった紺色等他の色に比べて色の種類が多いことも理解出来たようで、次回購入時の判断基準に加える要素になった。

被服学概論では、普段意識していない被服材料（素材）と被服衛生（洗濯）を中心に理解し家庭科に活用できることを目標とした。衣生活や環境の違いを科学と文化の視点から特性を捉えることにより知識と技能を様々な資料を用いて理解することが出来た。また、テキストにある演習問題に取り組むことにより実践教育に繋がったと示唆することが出来た。年々進化する被服材料については、最新情報の資料を用いてテキストには網羅出来ない内容を補足し、衣料量販店で販売されている商品についての理解に繋がった。

医療秘書実務実習演習（事前・事後指導）では、実習前には医療現場での心構えを説明した。実習後は医療従事者としての責任ある行動について説明をした。実習は短い期間であったが、机上の空論にならないように自覚ある行動が出来たかどうか振り返りをした。その上で、実習先にお礼状をまとめたが、日常生活の中でハガキを書くことが無いためか表書きの書き方や文章のまとめ方、文章のバランス等までを指導をした。社会に出る前に指導することが出来て安堵した。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

今回は、全て対面授業になったが、タブレット端末については、予め資料を手元にダウンロードして予習・復習に使用出来る、授業中に資料を拡大縮小して使用出来る、チャット機能で随時教員に質問等が出来る等、機能的かつ便利である。しかし、病院実習等では、老若男女問わずの人間が対象になり、

画一的な正解もないためリモート授業では不可能である。したがって、リモート授業の利点と対面授業の重要性をミックスしたハイブリッド型授業の必要性を大いに感じた。

今後は、共生社会の仕組みを知り、SDGs な社会になるため各自が出来る力を養うことが大切になる。そして、学生の不安材料を少しでも減らせるような対策とコミュニケーション力を維持しつつ、新しい生活様式に対応し大学生活が充実したものになるような授業を検討したい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 南涼子『ビジュアル図鑑 色彩心理学』ナツメ社
- 2 『インテリア・カラー・ブック』日本色研株式会社
- 3 大関徹他『ファッション&ビューティの色彩』日本色研株式会社
- 4 （社）日本色彩研究所「work paper 配色実習台紙」日本色研株式会社
- 5 （社）日本色彩研究所、配色カード 158a
- 6 菅井清美・諸岡晴美『消費者の視点からの衣生活概論』井上書院
- 7 各科目内で配布した資料

## ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 叶内 茜

(記入日：2023年9月1日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

前期：保育実習演習Ⅲ（事前・事後指導）、子どもの食と栄養、生活文化専門演習、保育・教育実習先巡回訪問指導、保育学（実習および家庭看護を含む）、家庭の健康学、女性学

後期：女性学（目白）、食と生命（我孫子、目白）、総合講座(2)、女性学基礎論（1）

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

私の教育理念・目標は、社会学士として幅広い視野を持った家庭科教諭、栄養士を養成することである。特に、私が専門とする家庭科保育分野では、多様化する社会において「社会全体で子育てを担う」という子育ての社会化意識を学校教育の中で育てていくことが求められている。本学の特色の一つである、「社会学の視点」をもった家庭科教諭の養成を行うことは、上記の力を備え、これからの社会を生き抜く力を持った人材の育成につながると考えている。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

#### (1) Teams の活用

令和4年度より継続して、①欠席者対応、②毎回の授業における学生へのフィードバックについては Teams も併用しながら進めた。

①の欠席者対応については、特に100名以上が履修している共通教育科目において、毎回の授業資料（スライド・配布プリント）をすべて Teams 上で共有し、履修者は自由に閲覧ができるようにした。その結果、本キャンパス以外の学生対応も含めた多様な状況の学生への即時の連絡伝達が可能となり、学生の提出物の提出状況も向上した。

②の学生へのフィードバックについては、毎回の授業後に Forms の事後学習課題を設定し、本時の授業のふり返り・翌週の事前学修を行った。教員は学生の提出課題を受け、次回の授業前までに学生に向けたコメントを入れた Forms を web 上で返却した。また、最後に教員への質問や伝えたい内容を記入する項目を設け、記入された質問のうち他の学生も興味がありそうな内容については次回の授業時に匿名で取り上げ、関連する授業資料を新たに提示するなどの工夫をした。その結果、授業回を重ねるごとに、学生からの質問が増えていき、授業評価アンケートにおいても学生が関心をもって授業に



取り組んでいる様子うかがえた。

#### (2) 実践的・体験的な学習の充実

対面授業では学校へ来て授業を受けることの意義を感じられることを意識して、実践的・体験的な内容を取り入れた授業実践を行った。

保育士資格取得のための必修科目「子どもの食と栄養」では、実習を多く取り入れることで、保育者としての配慮事項を実践的に学ぶことができた。また、ゲストティーチャーとして附属保育園の管理栄養士の先生にご講義いただき、現場の生の声が聞ける機会を大切にした。学生たちは、普段はほとんど知ることのない給食室の様子を知り、スタッフのプロ意識に触れ、保育者としての責任感を感じたようであった。

家庭科教諭免許状取得のための必修科目「保育学」では、子どもの実態に触れられる機会として、附属保育園での交流活動を行った。

家庭科教諭免許状取得のための選択必須科目「家庭の健康学」では、がんサバイバーであるゲストティーチャーを招き、実体験をもとに触診モデルを用いながらがんの早期発見にむけて実践的にセルフチェックの練習を行った。

そのほかの授業の中でも、なるべくグループワークや学生が発言する時間を設け、自分の考えを自分の言葉で表現できる機会を設けることを意識している。

### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

#### (1) Teams の活用

欠席者対応として行った Teams 上の授業資料配布は、学生と教員の相互の負担軽減につながった。また、学生の中には自身のふり返りとして授業を欠席していなくてもスライドを閲覧しながら事後学習課題に取り組む者もおり、学生の理解度に応じて自己学習を進めていくことができるというメリットもあった。

Forms を用いた事後学習課題については、授業実施日から間が空かないうちに学生へのフィードバックを返すことができる点や、学生の理解度に応じて次回の授業予告が伝えられる点にメリットが感じられた。毎回の授業の冒頭では 15～20 分間、Forms に寄せられた学生からの質問に答える時間を設けた。回を重ねるごとに質問の数は増えていった。

一方で、昨年度よりもさまざまな授業で Teams に触れる機会が少なくなったためか、Forms の提出状況が低迷している学生も少数ではあるが一部見受けられた。

#### (2) 実践的・体験的な学習の充実

実践的・体験的な学習を行った回は、学生が授業後に記入するふり返りの内容がより

自分ごととして捉えられたものになっていた。また、実践後のふり返りの授業では、個人の体験を言語化・共有化する時間を多めに設けたことで、さらに学生の理解が深まったことがワークシートからも読み取れた。学生が授業内で得た経験を、社会の中で活用していける力としていくためにさらにもう一步踏み込んだ内容を展開していけるとよいと考える。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

事後学習課題の中の授業内容のふり返りに関する学生の記述量は、人によって差が大きかった。今後は教員側からふり返りの視点をより詳細に示したり、文字数の基準を設けたりするなど、事後学習の質が向上するような工夫に取り組んでいきたい。

前項で述べたように、授業で得た経験を社会の中で主体的に展開していけるような形までもっていくことが今後の目標である。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・川村学園女子大学幼児教育学科公式インスタグラム（一般公開）
- ・川村学園女子大学生生活文化学科ホームページ（一般公開）
- ・Teams の担当授業チーム（学内のみ）
- ・学生のワークシート（学内のみ）
- ・学生が記述したふり返りシート（非公開）
- ・学生による Forms の記述（非公開）
- ・授業評価アンケート結果（非公開）

# ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 庄司 武史

(記入日：2023 年 9 月 24 日)

## 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

2023 年度の担当科目は以下のとおりである。

通年 生活文化専門演習（専門教育科目必修，我孫子）

前期 社会学概論（専門教育科目必修，我孫子）

情報リテラシー（共通教育科目必修，我孫子）

環境社会論（専門教育科目選択必修，我孫子）

社会学特論（専門教育科目選択必修，我孫子）

社会学（共通教育科目選択必修，目白）

現代の社会（共通教育科目選択必修，目白）

後期 コミュニケーション能力基礎演習（専門教育科目必修，我孫子）

情報処理 I（共通教育科目選択，我孫子，週 3 コマ）

サービス産業論（専門教育科目選択必修，我孫子）

ワークルール論（専門教育科目選択必修，我孫子）

## 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

作成者の専門である社会学の知見および企業での就労経験を基盤に，現代社会の様ざまな出来事を複数の角度・視点から捉えつつ自身の問題として冷静な受けとめと批判ができる人材，かつ加速・深化する情報社会において情報および情報ツールを安全かつ有益に活用できる情報リテラシーを身につけた人材の育成を目標としている。教育内容を学科が設定する「社会と生活」領域にとどめることなく，家庭や生活の領域をも視野に入れることで学科のカリキュラム・ポリシーの達成，ひいては大学・学部のディプロマ・ポリシーの達成に資することを期している。

## 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

2 の理念を達成するために以下のような方法を実践，または実践を心がけて

いる。

#### ①授業で取り上げるテーマや事例をできるだけ幅広くする

作成者は史資料分析を中心とする社会学の理論、学史、歴史社会学が専門であり、特定の研究・教育フィールドを有さないが、そのためにむしろ授業で取り上げるテーマや事例は幅広くとることができている。現代および今後の社会に重要とみられるテーマを取り上げつつ、作成者の専門からその歴史的経緯にも目配りし、領域的・時間的に多角的な理解に至れるよう工夫している。また、環境社会論やサービス産業論等、一部の科目では社会人当時の経験を盛り込むことで、学生が現在と今後の自分に身近に関わりがある問題として捉えられるよう工夫している。

#### ②iPad や Teams を活用する

近年の大学生は大学入学前にすでに様々な情報ツールに触れつつあり、かつ大学貸与の iPad を利活用している例もあるものの、その程度には個人差もあり（キーボードを使用した文章入力に馴染みがない、ウィルス対策ソフトやシステム上のセキュリティ機能を知らない等）、情報関係の科目だけでは情報および情報ツールを安全かつ有益に活用できる情報リテラシーの会得は容易でない。

作成者は担当するいずれも科目においても、事前に十分な注意をした上で（内容と関係のない使用をしない、作業中は教員が見回る等）、iPad や持参のスマートフォン・ノート PC を利用した情報検索、資料の閲覧等を行っている（授業内では官公庁・自治体・企業の HP や Wikipedia 等、ある程度、信頼性と安全性が高いサイトを利用するようにしている）。

また、Teams の課題機能を使用して内容の復習小テストを行い、機器とシステムの習熟と学習内容の理解向上にも利用している。レポート等課題の作成・提出も Teams 上で行うことでクラウドを介したファイル共有とやり取りの習熟を図っている。

授業で使用したスライドを教材として提供する際や資料を事前事後に配布する際に Teams のファイル機能を利用して、学生の学習および授業のスムーズな進行に利用している。

#### ③提出物に丁寧にリアクションをする

レポートやリアクションペーパー、学生の発言や授業前後の質問・相談には丁寧なコメントやリアクションを心がけている。学生自身の意見・見解に寄り添いつつ、違う角度からの捉え方や別の意見・見解を紹介するなど、多様な他者と共存する社会のなかで自身を相対化して、自分とは異なる意見・見解・視点があることの体得を図っている。提出されたレポート等にはすべてコメントを付して授業期間内に返却し、学生からの反応にも対応できるようにしている。また Teams やメールでの問い合わせに対しては一両日中に何らか反応することを心がけている。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

上記3で挙げた取り組みについて、作成者の実感および2023年度前期科目において実施された授業評価アンケートと本年6月末に実施された教員相互の授業参観後のアンケートの結果から浮かび上がった結果と評価は以下のとおりである。

①について。これは我孫子キャンパスの学生と目白キャンパスの学生とで評価に相違がみられた点である。我孫子キャンパスの学生は一般に社会学への関心が希薄な様子が当初から見受けられ、自分が普段、見聞きしていた言葉が社会学用語であったことや日常の何気ないふるまいや出来事が社会学で説明できることに驚きを示した学生があったことも確かながら、生活・家庭・栄養といった学科のイメージや必修科目での学びとは大きく異なる内容に戸惑いを訴える学生も多かった印象がある。

一方、目白キャンパスの学生ではたとえば「社会学」と「現代の社会」のアンケート結果において内容に興味を持たたという回答が多く、また学生との会話でもそのような実感を有している。

②について。この点は学生からも教員からも評価が高かった。学生からは教材や資料の利用に役立った、Teamsでの小テストが理解の向上とテスト対策に役立ったという声があったほか、教員アンケート結果でもとくに小テストへの利用と理解向上への取り組みを評価する声がみられた。作成者としても印刷物の作成や配布の手間や時間のロスを減らすことができ、効果がある実感をもっている。一方で、学生によってはTeamsそのものの操作・利活用に習熟していない場合もみられ、より丁寧な説明が必要との認識を有している。

③について。この点については学生・教員いずれのアンケート結果でも言及

がなかったものの、科目「現代の社会」と「社会学概論」においてレポートを提出した学生より、Teams のチャットで作成者が付したコメントが参考になったので卒業論文作成の際に実践したいとのリプライもあった。作成者にとっては慎重さと手間を要する作業ではあるが、こちらからのリプライをしっかり受けとめてくれた学生がいたことも喜ばしく、当面、継続していく予定である。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

現在のところ、全体的には順調に授業が進行できており、学生や他の教員の受けとめとも目立った齟齬をきたしていないという自己評価を有している。したがって今後も、評価できる取り組みについては継続していく所存である。一方で、作成者の側が企図を学生の側が受けとめるに至っていない取り組みについては、その意図と学生にとっての効用をより明晰に説明して理解向上に努めたい。また、とくに情報関係の授業はもちろん、それ以外の授業で活用している情報機器・ツール・システムについては利用の水準に依然として大きな個人差があることを改めて意識の上、より丁寧な利活用を進めていくこととしたい。

作成者が担当する科目は、学科の他の科目と比較すればいわゆる「座学」になることが多い。他の仕事や家事・育児等に左右されることなく、90分着席してじっくり学習する機会は、大学を卒業すればほとんど期待できないのが社会生活の実情である。大学での「座学」の意義・効用はそこにあるものと作成者は考えており、また、生活文化学科において充実している実習や実験とは様相を異にする、その意味では学科のイメージや必修科目での学びとは大きく異なる社会学関係の学びにも様相を異にするからこそその意義があるものと考えている。今後は、こうした幅広い視野やテーマをじっくりと学ぶ意義等についてしっかり説明し、学生ともできるだけ意識・認識を共有していきたい。

なお、学生のみならず、外部からの視線として前期に実施した高校訪問の際、対応の教諭より「学士（社会学）」という学位と栄養士や家庭科教員を養成するという学科の実際との齟齬・疑義を指摘する声もあった。この点も上記のような丁寧な対応により、時間をかけて解消していくことを心がけていく所存である。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

上記内容に係る以下のエビデンスはいずれも2023年度前期のものである。

- ・授業評価アンケート
- ・教員相互の授業参観のアンケート結果
- ・高校訪問時の聴取内容

※その他，記録に残っていない学生からの発言・意見等があったことを付言する。

以上

(記入日：2024年2月16日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

前期：食品衛生学 (2年選択必修科目 2単位)、食品加工学 (3年選択必修科目 2単位)、基礎調理学実習(1) (1年選択必修科目 1単位)、フードコーディネート論 (3~4年選択科目 2単位)、食品の官能評価と鑑別 (3~4年選択科目 2単位)、卒業研究演習 (4年必修科目 4単位)

後期：食品学 (1年必修科目 2単位)、食品学実験 (1年選択必修科目 1単位)、食品加工・開発実習 (3年選択必修科目 1単位)、フードスペシャリスト論 (3~4年選択科目 2単位)、卒業研究演習 (4年必修科目 4単位)

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が「食べる」というあまりにも身近で日常的に繰り返している行動について、生化学的視点で生命現象を理解し、自らの健やかな生活と生命を尊重する力を養うとともに、栄養士・家庭科教諭として専門的な知識を持って、どのようにして周りの人々の健康へ寄与できるのか主体的に考え行動する素量を身につけ、社会へ送り出すことである。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

食品学では、栄養学や調理学で学んだ知識と食品学の知識が結びつくように、時間的に可能な限り他の科目で学んだ内容も振り返り、自らが日頃生活している「食べる」という行為に食品学で得た知識を落とし込めるような説明を心がけた。また、食品学・食品衛生学では基礎となる暗記しなければならない内容が多くあるため、小テスト (エビデンス 1) を実施し知識の定着を促した。食品加工学では、身近にある加工食品を例に挙げ、写真や図表を多く取り入れて説明をした。

食品加工・開発実習では、FD研修において伊藤純准教授より紹介された Teams を利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法を取り入れた (エビデンス 2)。実習は午前午後の 2 クラスあり Teams のチームも 2 つに分かれて設定されていたが、教員が 1 つのチームに学生を集約し新たにチームを設定した。またチームの中には各班のチャンネルを設け、チャンネル内の「投稿」機能を用いて班員同士が実習結果やレシピ考案の意見を共有できるようにした。考案したレシピは、試作・製造し、初めての試みとしてコンテストに応募した。応募に必要な応募用紙の提出や考案したレシピの材料発注についての書類も Teams のチームの「ファイル」機能の中で行った。また考案したレシピについて発表させプレゼンテーションの方法も学ぶよう促した。

基礎調理実習や食品学実験においては、実習結果や実験データを原理などと照らし合わせて考察し、論理的に表現することができるよう、ノート・レポートの指導を繰り返し行い、事前事後の学習を促した。最終授業に授業の感想を発表する機会を設け、アンケート (エビデンス 3) を行い、授業の目的が達成されたか確認した。

フードスペシャリスト資格に関連する科目であるフードコーディネート論、官能評価と鑑別、フードスペシャリスト論では、調理実習室において食器やカトラリーを前にした講義や学外研修「レストランにおけるテーブルセッティング、テーブルマナー、サービスを学ぶ」、授業内での官能評価試験の実施と、授業外で生活文化学科の卒業研究の官能評価試験に参加させ、資格取得のための専門的知識を実際の体験からも習得できるよう促した。また、資格試験対策として授業内での過去問の解説および特別講座を設け、学生の資格試験合格を目指した。

卒業研究演習においては、週 1 回の教員と学生との研究打ち合わせと月 1 回のゼミを設け、各々の研究進捗状況を報告すると共に、学生同士が研究内容や結果についてディスカッションする機会を多く設けることで、より研究内容に興味を持ち自ら学ぶ意欲を持たせるよう促した。卒業論文提出後は、発表会に向けた週 1 回のゼミを設け、互いに発表スライドを指摘し合いプレゼンテーションの上達を促した。自らの研究発表だけでなく、ゼミ内で行われた研究内容や発表について理解し、互いに協力し合うことの楽しさや重要さを感じ取れるような指導を心がけた。



#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

小テスト（エビデンス 1）を行った授業では、期末試験において知識の定着を確認することが出来た。しかしながら授業評価アンケート（エビデンス 4）によると食品学の授業において 2 割の学生が「十分に理解できるものでしたか？」「理解度に沿って行われましたか？」の問いに「そう思わない・どちらかというと思わない」と回答しており、1 年次の基礎科目における授業法に改善の必要があると感じた。

Teams を利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法を取り入れた食品加工・開発実習では、学生が実習で製造した加工食品の写真や実験データを「投稿」に掲載することで、午前・午後クラスがクラスを越えて互いに実習の様子や結果を確認していた（エビデンス 2）。またレシピ開発について授業内で話し合ったことをチャンネル内に書き留めたり、授業外で調べたことや意見を書き込みしたりと交流する様子が見られた。これは、学外実習のために毎週公欠学生がいる 3 年次の授業にとって大変有効な手段であった。また、各班の話し合いの様子を教員が確認し、教員からのアドバイスも授業時間外に書き入れ指導することもできた。班ごとに考案したレシピは「第二回オリジナルアップルパイレシピコンテスト」に応募し、1 作品が「優秀賞」を受賞し、学生の達成感に繋がった。

食品学実験では授業後のアンケート（エビデンス 3）より「実験は苦手意識があったが授業を終えた今、実験が好きになった」、「食品を購入する際にラベルを見て成分を確認するようになった」、「レポートが再提出として返却され、わからない部分をそのままにしない努力をしようと思えた」、「回数を重ねていくうちに段々と分かるようになり班で協力し合い実験を楽しむことができた」といった感想が見られ、基本的な化学実験を修得し、実験データを論理的に表現できるようになった事が示された。

フードスペシャリスト資格試験には受験者の半数以上が合格し資格を取得した。

卒業研究演習においては、ゼミ内で学生同士が互いに指摘し合い高め合う様子が見られた。また、学科で企画した「ベストプレゼンテーション賞」を目指し、ゼミの全ての学生が研究発表の内容を熱心に検討する姿が見られた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

専門分野の知識の修得については、授業の期末試験での評価だけではなく、卒業時に栄養士として知識が定着していることが重要である。その為、2024 年度からは栄養士実力認定試験の受験を視野に入れた指導をしていくこととする。1 年次の基礎科目については、毎回小テストを行う等、理解度を上げるよう授業法を改善する。フードスペシャリスト資格に関わる科目については、受験者全員を合格に導けるように試験対策をより強化したい。具体的には、教員が過去問の解説をするよりも学生が自ら解説して知識を習得できるような授業法を取り入れたいと考える。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1) 小テスト（非公開）
- 2) Teams を利用した学生同士のディスカッションの場の設定および教員と学生との双方向授業法（非公開）
- 3) 最終授業でのアンケート（非公開）
- 4) 授業評価アンケート（非公開）

# ティーチング・ポートフォリオ

学科：生活文化学科

氏名 松本梓

(記入日：2024年 2月 26日)

## 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

基礎栄養学(前期、必修科目、2単位)、食生活論(前期、選択必修科目、2単位)、応用調理学実習(1)(前期、選択科目、1単位)、基礎ゼミナール(前期、必修科目、2単位)、公衆衛生学(後期、選択必修科目、2単位)、フードサービス論(後期、選択必修科目、2単位)、基礎調理学実習(2)(後期、選択必修科目、1単位)、給食管理実習(2)学外(後期・前期、選択科目、1単位)、生活文化専門演習(通年、必修科目、4単位)、卒業研究演習(通年、必修科目、4単位)、卒業研究(通年、必修科目、6単位)

## 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

- ① 学生が自ら考え、自ら学ぶ力をつけること。専門的な知識の修得および定着を図り、さらに、自ら進んで課題に取り組む姿勢を養う。
- ② 協調性を身につける。栄養士は多職種と連携して仕事を行う専門職である。そのため、実習ではグループワークを通して、共に協力し合う大切さを学ぶ。

## 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

基礎栄養学や公衆衛生学は、専門用語が多く苦手意識がある学生が多い科目である。そのため、授業の冒頭において毎時間 Forms にて復習クイズを実施し、知識の定着を図った。また、復習クイズにて取り上げた問題は、再度スライドを用いて解説を行った。

1年生で履修する基礎栄養学は、化学構造式が教科書に記載されている場合が多い。高校で有機化学を履修していない学生が多いことを想定し、授業スライドは化学構造式をイラスト化し、学生が苦手意識を持たないように心がけた。

基礎調理学実習(2)および、応用調理学実習(1)では、栄養士として必要である食材の理解や、食文化の理解および、調理技術修得を目的として実習構成を考えた。また、調理は化学変化によって美味しさが生まれることから、学生が他の授業と調理実習の内容を関連付けられるように、実習内容を踏まえた課題を設定した。課題は、実習内において説明を行った。また、説明内容を基に授業時間外で調べ学習を行ってもらい、学習内容をノートにまとめる事で、自発的な課題解決力を養うように工夫を行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

多くの学生は一生懸命授業へ取り組み、単位を修得した。授業スライドは授業実施後に Teams へ掲載し、事後学習への活用を促した。授業評価アンケートでは、「復習を兼ねて学習を行うことができた。」「書きそびれがあっても後から見直すことができ、復習につながった」との回答があった。

調理学実習は、技術の修得を目標の一つとしていたが、実技試験の結果から技術が向上した学生が少なかった。授業評価アンケートでは「実習が楽しかった」という回答があったものの、その先へ繋がる姿勢が見受けられた学生が少なかった事が課題である。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

基礎栄養学や公衆衛生学など、専門的な内容を扱う授業では、引き続き丁寧な説明を心がける。また、授業スライドは、学生に伝わりやすい表現やイラストを使用し、化学構造や法律など苦手意識を持ちやすい内容であっても、学習しやすいような工夫を行う。

調理実習は、調理技術の修得を目的に、自宅でも調理を行う習慣を身につける様な実習構成とする。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・授業内実施課題(非公開)
- ・授業評価アンケート
- ・渡邊早苗 他 スタンダード人間栄養学 基礎栄養学 朝倉書店
- ・公衆衛生がみえる 2022-2023 メディックメディア
- ・武山英麿 他 公衆衛生学・健康管理概論 第一出版
- ・山崎清子 他 NEW 調理と理論 同文書院

## ティーチング・ポートフォリオ

生活文化学科 朴善美

(記入日：2024年2月14日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

前期：臨床栄養学 (2年選択必須科目、2単位)、栄養指導論 (1) (2年選択必須科目、2単位)、ユニバーサルデザインフード (2年前期選択科目、2単位)、栄養指導基礎実習 (3年選択必修科目、1単位)、公衆栄養学 (3年選択必修科目、2単位)、基礎ゼミナール (1年前期必修科目、2単位)、生活文化専門演習 (3年必修科目、4単位)、スポーツ栄養相談 (3~4年前期選択科目、2単位)

後期：臨床栄養学実習 (2年選択必須科目、1単位)、ウェルネス栄養指導実習 (3年選択必修科目、1単位)、応用調理実習 (2) (2年選択必須科目、1単位)、ライフステージ栄養学 (2年選択必修科目、2単位)、栄養指導論 (2) (2年選択必須科目、2単位)、生活文化専門演習 (3年必修科、4単位)

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

科学的根拠に基づいた栄養指導で人々の健康を守る栄養士の育成が教育目標である。栄養バランスの取れた食事は健康維持・増進のために重要である。長期間に渡る偏った食生活を送ることは生活習慣病の発症リスクを高めるなど、人々の健康に及ぼす影響は大きい。食事が疾病の発症要因にもなりうることや栄養バランスの取れた食事の重要性を理解することは栄養士に欠かせない知識である。食の専門家として社会に出てすぐに活用できる技術や知識を身に付け、実践能力の高い学生の育成を目指す。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

臨床栄養学、栄養指導論、ライフステージ栄養学、公衆栄養学などの講義科目においては、授業で学んだことを振り返り次回の授業につなげるためにリフレクションシートを活用している。学生が受動的になりがちな講義科目にリフレクションシートを取り入れることで自ら学習内容を把握し、主体的になることを目指す。また、学生の理解度を確認することにもつながり、教員と学生の間でのコミュニケーションツールにもなる。

臨床栄養学実習、栄養指導基礎実習、ウェルネス栄養指導実習などの実習科目においては臨床現場での実務経験を基に様々な症例をあげた問題解決型の学習を取り入れている。講義科目で学んだ知識を活かし、自ら症例の問題点を見つ

けて解決することで思考力を養い、知識が定着することが期待される。また、グループワークを行い、他者と意見を交わりながら一緒に問題を解決することで協調性を高める。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

リフレクションシートを作成することで学生は毎回授業内容をまとめることができた。しかし、リフレクションシートの内容に個人差が大きかったことが今後の改善すべき点である。

学生が主体的に様々な症例の問題点を考えて解決することを繰り返し行うことで曖昧な知識が定着し、応用力の向上につながったと考えられる。しかし、グループワークにおいては、役割分担が明確にできず、特定の学生に仕事の量に偏りが生じた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

リフレクションシート内容の個人差をなくすために、翌週にコメントをするなど、積極的にフィードバックを行う。理解ができていない学生が多い箇所は次回授業の開始時に必ず復習する時間を設ける。

実習科目においてはグループワークを円滑に進めるために役割分担表を作成するなど、役割分担をより明確にする。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

##### 1) リフレクションシート（非公開）